



共生の時代

'11
6月

●発行:グリーンコープ共同体育理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅前一丁目5番1号 カーニープレイス博多3階 TEL092 (481) 7923 FAX092 (481) 7876



プロフィール
1968年山口県生まれ、田布施町在住。
妻(ケニアでのボランティア仲間)、長男(11歳)長女(8歳)二男(6歳)三男(3歳)の6人家族。グリーンコープやまぐち生協組合員

ケニアの小さな村のように

菓子屋・農業・保育園の
オーナー兼雑用係

大下 充億 さん

1 1997年、ボランティアで行ったケニアで、現地の友人の故郷、小さな村を訪れた。そこでの3週間が、体の奥底から大下さんにどう生きるべきかを目覚めさせた。村人は年1回の農繁期以外は、炭焼きやお菓子作りなど、それぞれ自分がしたいことをする。暮らしに必要なものはみんなで分かちあい、ほぼ自給自足の生活。衣類などを買う最小限のお金は、炭などを売って得ている。村人はみな輝く美しい目をして、幸せに暮らしていた。「生きるってすごくシンプルなことなんだ」と心底思ったという。

「自分探しの20代は終わりで、この村人のような生き方を、百姓をしながら実現しよう」と故郷の田布施町に帰る。しかし、両親の老いに親不孝を実感し、家業の菓子屋を継ぐ。13年前のことだ。菓子作りをはじめると材料や添加物が気になり、可能な限り農薬や化学物質を使わない、自然な材料にこだわる菓子作りに切り替えた。2年ほどで菓子屋は繁盛し、気がつけば従業員を増やし設備投資をするという経済のスパイラルに陥りかけていた。これは自分の求める生き方ではないと、農地5反を借り農業をはじめ。田は耕さずに草の間に苗を植え、肥料も農薬も使わず主に水の管理だけで生育させる米作りに取り組み。直播きの小麦も作りはじめる。「農業はおもしろい」。現在では、米は一反に約7俵の収穫があり、小麦は菓子の材料に。農繁期には店を休業していたが、2003年頃からは、徐々に菓子屋を弟に任せ、菓子屋半分、農業半分の働き方にしていく。

8年前には、自然の中での暮らしを求めて、店から10分ほどの山間の限界集落にある廃屋を購入し、自分で改築しながら家族で住む。いつの間にか子どもの友だちもたくさん遊びに来るようになり、昨年から、「こびとのおうちえん」という保育園をはじめた。「おうち」は家庭のイメージだ。ここには保育のためのカリキュラムはない。ケニアの村のように、大人たちのゆとりとした手作りの暮らしを見ながら、自然の中の生き方や自分らしく生きる術を身につけて欲しいと思っている。現在18人の小さな仲間が、それぞれその日一番したいことをしながら、放し飼いの鶏や自然の中で日々を過ごす。大下さんの周りにはいつの間にか人が集まり、菓子屋も農業も保育園も中心になる人が出てきた。「今では自分はそのどれを手がける雑用係」と言う。

「生活に必要なお金は最小限に止め、自然を大切にしながら、自分がしたいことをして生きる。それが、環境に配慮した持続可能な社会をつくることに繋がると思う」「自分の生き方に共感してくれる仲間とコミュニティをつくりたい」と大下さんは夢を語る。

グリーンコープは東日本大震災の 第二次復興支援募金に 取り組んでいます



第二次募金の期間は5月16日～7月30日で、生活再建や復興支援のために使われます

Contents

フランスの多重債務対策調査レポート② 相談者に寄り添い支えるNPO	2
うちのメーカー・うちの生産者⑧ 那須ファーム 産直たまご	3
1995年からずっとグリーンコープは脱原発をめざしてきた グリーンコープの脱原発政策 東京電力の原子力発電所の事故を受けての残留放射能検査報告	4・5
お米と野菜を食べよう! —3— 各単協の取り組みが目白押しです	6
グリンコープ共同体 BMW技術学習会 自然の循環システムを農畜産に生かすBMW技術	7

私たちの想像を絶する津波は一瞬にして街を飲み込んでしまいました。多くの人の生命が、日常が跡形もなく奪われ、一面瓦礫と化しました。

人と人との絆が希薄になったと言われて久しい日本ですが、被災者に心を寄せ何かしなければという支援の輪が広がっています。「復興」という初心に帰って、みんなが助けあい、心をつなげる時が来たのだと思います。

春の選抜高校野球では、



阪神淡路大震災の年に生まれた球児の選手宣誓に感動を覚えました。生かされている生命に感謝して、仲間を支えられることで大きな困難を乗り越えてきたのだと思います。

生命に寄り添い、人と人とを繋いでいくグリーンコープの役割は今後更に大きくなっていくと思います。がんばろうグリーンコープ! がんばろう日本!

グリーンコープ生協(島根)理事長
角幸恵

相談者に寄り添い支えるNPO



左から1人目が近澤さん、3人目が行岡さん

2010年11月、グリーンコープの生活再生事業は、フランス共和国の多重債務者の救済と再発防止のすぐれた取り組みを学び、事業に生かすために第二次フランス調査に取り組みました。シリーズ第1回(3月号)では生活困窮者に寄り添い支援する金融機関の取り組み、ケース・デ・パリニュ銀行(積立信用金庫)アルザス支店と、パルクール・コンフィオンス(信頼という名のNPO組織)の活動について報告しました。

シリーズ第2回は金融機関と連携しているNPO、家族協会県連合(UDAF)とクレジユスの取り組みについて報告します。

フランスの多重債務対策 生活再生相談員 現地調査レポート シリーズ②

長年家族を守る支援を続けてきたフランス独特のNPO
家族協会県連合
(UDAF)

フランス共和国には、独自性が強く実生活に即した大きなNPOがたくさんある。家族協会県連合(UDAF)もその一つだ。第二次大戦のナチスへの抵抗運動(レジスタンス)から生まれた国民評議会が母体となつて1946年に家族協会全国連合(UNAF)が誕生した。ナチスへの抵抗運動は厳しい環境の中、家族ぐるみで闘われた。戦争が終わり、残った課題は家族を守ることであり、戦後もこの組織が家族の多様な問題の解決を図り、国の政策などに大きな発言権を持つほどに成長してきた。その地方組織がUDAFである。私たちが訪問したUDAFは50のNPOをまとめた連合体である。バ・ラン県(ライン川下流地方)では会員2万世帯、県内で30人の理事が6〜8週間ごとに理事会を開催し、10人の職員を雇用。200人以上のボランティアが活動している。

具体的には、家族の健康を守るための社会保障制度を作り、安心して子どもを産むための子どもの保育支援などを中心に活動してきた。今日の家族問題の軸には、家族全体・子どもの生活・年金・身障者・認知症

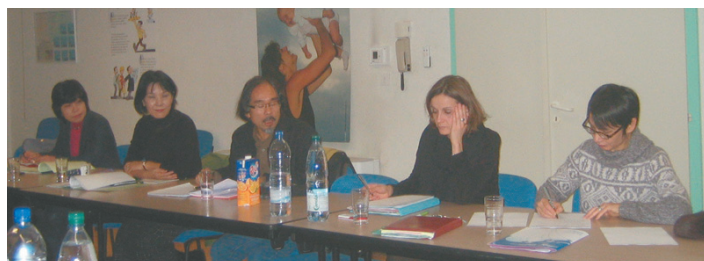
の5つの課題があるとUDAFでは捉えている。社会保障制度の活用だけではなく、家庭裁判所判事の依頼を受けて、家計管理指導や金銭管理により生活資金や子どもの養育資金そのものを直接的に管理する活動などにも取り組んでいる。

とりわけ子どものいる家庭については、子どもの権利や生活を守るために家族に寄り添いサポートしている。例えば、日本で言う児童手当のような子どものための公的助成金などが確実に子どもの教育や生活に使われるように、教育専門の資格を持つ相談員や家計診断の国家資格を持つ相談員が派遣され、家族とともに相談して管理し使い道をすべて公開している。同じように多重債務者の相談や家計管理にも対応して、サポートしている。

さらに、行政や公的機関の政策会議や協議会に人を送り出し、家族問題について意見を届け、国の政策立案へのルートも確保している。

「分野が違うので、UDAFメンバーはホームレス支援などには取り組んでいないが、そのような状態にならないために家族支援に取り組んでいる」という話は、家族に寄り添おうとする私たち生活再生相談員の共感をよんだ。

グリーンコープ共同体顧問・生活再生相談員 行岡みち子



UDAFで説明を聞く調査メンバー

多重債務者へ寄り添い、生活再生へ導くNPO
クレジユス
クレジユス・アルザス
クレジユス・パリ

北部アルザス・ロレーヌ地方は廃坑の町で失業者、多重債務者が多い。ストラスブル裁判所の司法官が多重債務者の悲惨な状況を解決するために1992年に結成したNPOがクレジユスだ。現在、フランスの14地方、19カ所の支部を拠点に連盟を結成している。

フランスのNPOは、国や行政からの助成金と寄付金、ボランティアに支えられ、多様な活動を展開している。クレジユスは2008年、ラジオ・クレジユスというインターネット回線



▲クレジユスで説明を聞く調査メンバー



クレジユスで話を聞いたNPOメンバー

を使ったラジオ放送局を開設した。多重債務者が専門家に直接相談をしているようすを放送しており、インターネットという身近な方法で、正確な情報が届く画期的な番組となっている。クレジユスの活動の基本スタンスは、多重債務に陥っている人を無条件に受け入れ、誰にも相談できずに孤立している相談者を理解することからはじまる。そして、相談者と一緒に現状の把握や原因を探り、法的(多重債務委員会への書類書きの手伝い)、経済的(公共料金の引き下げ交渉・マイクログレジット貸付の付添い)、社会的(家族手当等の公的制度のアドバイス)、心理的(臨床心理士への相談)など、あらゆる角度からの解決方法を探していく。

今回初めて訪問したクレジユス発祥の地、アルザス地方のクレジユス・アルザスではラゼル・コフィンガ(金融会社)とパートナーを組んで、マイクログレジット貸付(セーフティネット貸付)の付添いを多く手がけている。マイクログレジット貸付とは、生活資金をどこからも借りることのできない人のための少額の貸付制度である。利用できる項目が決まっており、就職に關すること、車などの購入、住宅環境の整備などで、いずれもきちんとした計画がなければ審査は通らない。クレジユスなどのNPOの付添い(家計相談・返済計画)を受けることも義務付けられている。これは、私たち相談室の貸付と同じで、貸付後も必要に応じて生活再生のためのサポートが続く。まさに生活を再生するための貸付けであり、付添いは相談室での面談にとっても近いと感じた。

2009年に続き、2回

目の訪問となったクレジユス・パリでは、今年度から相談に来た人(希望者のみ)をグループに分けて金銭教育・家計管理教育に力を入れていた。4段階にカリキュラムが組まれている。①お金に関して自分たちの考え方や経験を語る。②一人ひとりの問題を例にあげて解決策を考える。③家計管理と銀行との関係などを知る。④元銀行マンを講師に、それぞれ持ち寄った問題を話しあう。「参加者の中には、自分が学んできたことを活かしてクレジユスのボランティアになった人もいる」と、代表者は嬉しそうに語った。このように多重債務者たちがそれぞれの実体験を語り、解決策を模索していくグループカウンセリングはフランスでは珍しい手法だと言う。フランス人ほどプライバシーや個人にこだわらない日本の国民性を考えると、この手法は私たちの相談室でも可能かもしれないと感じた。

同じクレジユスでも、アルザスとパリでは活動内容が違い、その地方に合った形での活動になっている。地方のアルザスと都会のパリでは相談者の債務状況や生活環境、そして仕事の有無などが大きく違うからである。しかし、多重債務者を救いたいという気持ちは、職員、ボランティア共に強く持っていることが伝わってきた。相談者が穏やかな日常を取り戻せるよう、気持ちに寄り添い支えようとする姿勢は、国は違っても私たち生活再生相談員と同じだと感じた。

大分生活再生相談室相談員

近澤和子



産直たまご



那須ファーム社長 那須修一さん



生後1日のひよこから育てる。生後21日間は温度管理をし健康に育つよう特に気を使う



黄色いトウモロコシ等の中に籾米や玄米が混じる産直たまごの飼料。餌を与えると籾米や玄米から先になくなるという

グリーンコープとは前身生協の時代から、38年にわたる付き合いになる。那須さんは産直関係の良さを

グリーンコープの産直たまごには、安心・安全のためのいくつかの大きな特長がある。たまごを産む期間の母鶏の餌はすべてnon-GM（遺伝子組み換えでない）飼料。その多くを占めるトウモロコシはポストハーベストフリー（収穫後の農薬不使用）だ。薬剤は極力使わずに育てる。また鶏舎は自然光や風が入る開放型。強制換気やウィンドレスで調光するなど、効率的にたまごを産ませるシステムは採用していない。

二般的にたまごは一つの商品としてとらえられ、母鶏の飼育も効率優先です。グリーンコープは母鶏を健康に育てることを第一に考える。だから安心・安全なたまごができるんです。通常、たまごには賞味期限が表示されているが、**産直たまご**にはそれに加え採卵日も表示している。常に新鮮なたまごを届けるため、365日欠かさず採卵する。さらに出荷から配達まで5℃以下の一貫した低温流通。採卵から翌々日までは組合員の手元に届く。新鮮なたまごを届けるための、全国的にも類を見ないシステムだ。

母鶏の健康を第一に。にわたりの病気予防のため一般的に使われる抗生剤などの薬剤を基本的に使用しないため、母鶏の体調管理には万全を期している。17年ほど前、東京で起こったサルモネラ菌によるたまごの集団食中毒に、那須さんは「人の役に立ちたい」とはじめたことが、人に危害を与え、人にも被害を及ぼすことを受けた。それから公衆衛生について勉強。HACCP（衛生管理の手法）を国内でいち早く導入し、1998年にはこの手法を取り入れ鶏舎を建て替えた。役目を終え食肉

となる親鶏の出荷は、**グリーン・オールアウト方式**。鶏舎の清掃にも職員全員で常に気を配っている。「健康なにわとりはたまごをよく産みます。顔を見ればたまごを産んでいるかどうかわかります」。鶏種は強健で病気に強いゴトウもみじ、ゴトウさくら、ボリスブラウンの3種。体が大きいので餌が大量に必要で効率は悪いが、卵質は良い。那須さんいわく、「味は、あつさりしているけど、コクがあるんです」。

この4月から、**産直たまご**の母鶏の餌は、国産飼料米の割合がこれまでの5%から15%に増えた。この取り組みは、輸入トウモロコシの割合を減らして国産飼料米を使うことによって飼料の自給率を上げること、そして飼料米の作付けにより水田が増え、ひいては日本の農業を守ることにつながるものだ。

※1 エサを食べさせないことで人工的に換羽させ、産卵期間を延長する
※2 無窓鶏舎。人工的に光を調整し、産卵のサイクルを早める
※3 1棟の鶏舎の鶏を一斉に出荷し、その後一斉に新しい鶏を入れること。出荷した後那須ファームでは73日間鶏舎を空けておく。その間に洗浄、殺菌する

私たちの毎日の食生活に欠かせないたまご。おいしくて安心なたまごを生産することは、そのたまごを産む母鶏を育てることからはじまる。40年以上、安心・安全、おいしくて新鮮なたまごを追求し続けている産直たまご生産者・那須ファーム社長の那須修一さんに、たまご生産にかける熱い思いを聞いた。

にわとりとたまごが生涯の仕事

那須さんがひよこ525羽を買い入れ、一人で養鶏業をはじめたのは二十歳の時。農業高校1年生の時に養鶏を生業の仕事と決め、卒業後2年間、研修所や独学で、にわとりとたまごに関することあらゆることを必死に勉強した。鶏舎は材木を山から切り出し製材し、古材も利用して基礎から自分で造った。

創業時からの経営理念は「にわとりと卵を通して人のお役に立ちたい」。以来43年間、この信念を貫いて養鶏に携わってきた。



自然光と風が入る鶏舎。9棟中、オールイン・オールアウトのため清掃中の1棟を除く8棟の鶏舎で、7～8万羽を飼育している



たまごセンターでその日採卵したたまごをバック詰めする。汚れているものや割れているものはここでチェックする



鶏舎で出る鶏ふんは、阿蘇の伏流水とBMW技術により生物活性水となる。鶏の飲水になり、夏は温度を下げるため鶏舎に噴霧することで臭いもおさえる

本の農業を守るこの取り組みはグリーンコープ運動そのもの。僕にもそれがしみ付いています」と笑う。

究極のたまごをつくりたい

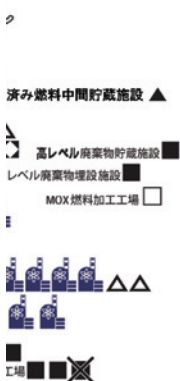
那須さんは今、後継者の育成に力を入れ、若者数人を幹部候補として育てている。「人材の育成は何より大事。私の時代とは違いますが、自発的に学んでほしいと思います。どんなに機械化しても、最終的には人です」。

後継者にバトンタッチした後の那須さん個人の夢は、究極のたまごをつくること。「めざすは野生のたまごです」。母鶏の餌はすべて粉殻のついたままの米、BMW技術を使った循環型の養鶏、もちろん無投薬飼育で。今は鶏インフルエンザの問題があり難しいが、平飼いが理想だ。「人間が野生だつた鶏を家禽にした。大事に育て、たまごを食べ、最終的に肉も食べる。私たちはその責任があります」。自然の中に生かされるものとして、人と同じ生命としてにわとりと向きあう。そして養鶏を通して人の役に立つことを常に考えてきた。

その那須さんの姿勢が、安心・安全でおいしいたまごを私たち組合員に提供することにつながっている。

原発をめざしてきた

施設



所	核燃料施設
運転中	■
建設中	□
安全審査中	□
おもな機補地点	▲

止・中止したことを示す。
の資料より作成】

私たちは、私たち自身の暮らしのあり方を見直すことを含め、みどりの地球をみどりのままで子どもたちに

私たちは、私たち自身の暮らしのあり方を見直すことを含め、みどりの地球をみどりのままで子どもたちに

私たちは、私たち自身の暮らしのあり方を見直すことを含め、みどりの地球をみどりのままで子どもたちに

私たちは、私たち自身の暮らしのあり方を見直すことを含め、みどりの地球をみどりのままで子どもたちに

私たちは、私たち自身の暮らしのあり方を見直すことを含め、みどりの地球をみどりのままで子どもたちに

私たちは、私たち自身の暮らしのあり方を見直すことを含め、みどりの地球をみどりのままで子どもたちに

私たちは、私たち自身の暮らしのあり方を見直すことを含め、みどりの地球をみどりのままで子どもたちに

私たちは、私たち自身の暮らしのあり方を見直すことを含め、みどりの地球をみどりのままで子どもたちに

私たちは、私たち自身の暮らしのあり方を見直すことを含め、みどりの地球をみどりのままで子どもたちに

私たちは、私たち自身の暮らしのあり方を見直すことを含め、みどりの地球をみどりのままで子どもたちに

3月11日、巨大地震が東日本を襲い、巨大な津波が太平洋沿岸一帯を瓦礫の山にしました。この災禍は、東京電力の福島第一原子力発電所が制御不能に陥る深刻な事態を招きました。地震多発国日本には事故前、54基の原子力発電所が稼働していました。その危険性はこれまでも指摘されてきましたが、その想定さえも超える事態が現実のものとなりました。この人災とも言える原子力発電所の事故は、さまざまな問題を私たちに投げかけています。

グリーンコップは、25年前のチェルノブイリ原発事故を契機に、脱原発をめざすことを、グリーンコップ運動の取り組みの柱の一つとしてきました。1988年のグリーンコップ設立から7年間の検討を経て、1995年に「グリーンコップの脱原発政策」をまとめました。

今日、グリーンコップの脱原発政策は間違っていないかった、その中ですめてきた取り組みは意味のあるものであったと、改めて確認しています。しかし、日本社会での脱原発への歩みは遅々としてすすんでこなかったという現実も横たわっていることは確かです。

近年の世界の趨勢は、地球温暖化や有限な化石燃料の問題解決の切り札として、原発推進へと傾いていました。東日本大震災はその流れを、エネルギー大量消費の社会のあり方を見直すべきだと言う世論を醸成しています。

グリーンコップとしても、これまでの脱原発の歩みを再確認し、社会に向けて脱原発を呼びかけつつ、内的にも改めて、その歩みをすすめていくことを検討しています。

今号では、脱原発政策を紹介します。尚、本文中の原発の状況などは、この政策が採択された1995年当時のものです。

加えて、4～5月に実施した放射能検査の結果を報告します。

グリーンコップ脱原発政策（一部省略）

1995年3月15日グリーンコップ連合通常総会にて採択

はじめに

これまで私たちは、原発は「いのち・自然・くらし」を脅かすものとして取り組みをすすめてきました。

しかし、私たちの暮らしはこの日本の中でエネルギー多消費型の構造に浸っており、原発が「いのち・自然・くらし」を脅かし未来の子どもたちに大きなつけを負わせるものだということが分かりにくくなっています。

私たちは、私たち自身の暮らしのあり方を見直すことを含め、みどりの地球をみどりのままで子どもたちに

脱原発に向かおう

（一）原発反対の理由

私たちは原発も含めたエネルギー多消費社会に慣れきってしまっています。便利な生活と引き換えに人類は地球規模での環境破壊、農業汚染、公害等を引き起こし、更には南北問題、大国主義がもたらす戦争を起こしてきています。現状のまま多消費社会が推移すれば環境破壊はより進行していきます。今脱エネルギー多消費社会（脱石油・脱原発）をめざさなければ、地球規模の環境破壊を止めることはできません。

原発の燃料となるウラン

238の半減期が45億年であり、放射能の影響を未来の人類まで負わせることになり、最大の環境破壊です。人類は「死の灰」（注1）を無毒化することはできません。死の灰はどうしようもない厄介物です。海外ではスリーマイル島原発のメルトダウン事故、チェルノブイリ

原発事故などが起こっています。日本では大事故に至っていませんが美浜の事故をはじめ、各地で蒸気発生器細管の修理交換が頻繁に行われています。今後、人類に、そして、地球に多大な影響を及ぼす原発の重大事故がいつ起きてもおかしくない状況です。

原発の事故による放射能汚染だけでなく、過去・現在の核実験で放出された放射能からは逃げるすべがありません。放出された放射能は、土地・水・植物・生物を汚染し続けます。現在も乾いたけや飼料用の脱脂粉乳からセシウムが検出されており、食べものへの

放射能汚染は原発・核兵器がある限り続きます。

プルトニウムの再利用は、

世界的には経済性と安全性の観点からほとんどの国が撤退していますが、日本においては、もんじゅの臨界等、高速増殖炉を推進しています。原子力の「平和利用・商業利用」を目的とするといわれる原子力発電ですが、これらのことによつて、日本に核兵器保有の可能性が生まれ、軍事に転用することができるようになりました。

現在も原発関係の情報は基本的に公開されず、国及び一部の建設会社、電力会社が情報を占有しています。原発での事故が起きても原発周辺の住民には知らされず、ウランの搬入や使用済み燃料の排出・運搬は日時も輸送ルートも極秘で行われています。プルトニウムを日常的に原発で燃料として使用されるなら、年間100tものプルトニウムが日本を移動することになります。猛毒で且つ7、8kgもあれば核兵器の原料になり得るプルトニウムを狙った犯罪やテロリストの対策は、電力会社の手には負えず、国家による警備と原発関連情報の一元管理が予想されます。非公開が一般化すると、最終的には民主主義社会が破壊されてしまうことになります。

原発でつくる電力の大量消費地は大都市です。過疎地に原発を建設するのは建設用地が確保しやすいこと、経済効果に期待させ地元への反対が少ないことと事故が起きたときに犠牲者が少ないからです。都会では電気による恩恵を受けるだけ受け、事故や廃棄物な

どの厄介な犠牲をすべて過疎地へ追いやるという過疎地差別の上に原発は建設・計画されています。一方、過疎地へは原発建設の見返りとして、電源三法交付金を立地点の市町村へばら撒き、地元での反対運動の分断や交付金を巡る利権争奪により、地域での人間関係、地域社会を壊しています。

各原発には何百人もの下請け労働者が全国から集められて働いています。放射能に身を晒して炉心部で作業し、被曝し、がんや白血病となつても何の補償もされていませんでした。しかも、被曝に対する世間の差別的な対応から、被曝した事実を隠さざるを得ない状況も生まれています。山谷や釜ヶ崎、過疎地の農民、失業者、外国人出稼ぎ労働者などの下請け労働者の危険な労働を前提に、原発は運転されています。

どのような活動を行うのか

私たちは自然にもっとも近い野菜や米・麦などの農産物の抱える問題から、自然にもっとも近い原子力の問題まで現代文明の病理を照らし出し、自然と共生する社会の建設に向け、暮らしの中、地域の中から取り組みをすすめます。

（一）生活の見直し 石油の利用効率を高め、無駄なエネルギーを使わない暮らし

大量生産・大量消費・大量廃棄は石油を代表とする化石燃料を文字通り湯水のように使つて行われてきました。地球規模での環境破壊を食い止めるには化石燃

料の総使用量を抑えること、そのためにはできる限り効率よく使うことが必要です。また、電気エネルギーを熱エネルギーに変換する際のエネルギーロスがもつとも大きい電力の熱利用をできる限りやめることや、発電の廃熱を利用するコージェネレーション（注2）の普及、自動車の燃費の向上なども考えられます。社会全体のエネルギー利用の見直しではリサイクルシステムの確立で資源を繰り返し使うことも脱石油社会の実現には必要です。

大量生産・大量消費・大量廃棄は、工業だけでなく、農業の面でも行われてきました。単一作物を大量に一地域で作るために、農業・化学肥料が大量に投与され、農地は本来の機能を失いつつあります。農業者の健康に害を及ぼすだけでなく、農業・除草剤は河川に流入し飲み水までが汚染されています。消費者は見かけのよい生産物や、季節を無視して石油を大量に消費して栽培する作物を求めてきた暮らしを見直すことが必要です。以上の方向性を社会としてめざす一方で、それを支える私たち自身の意識改革と脱石油をめざす取り組みが必要です。石油の利用効率を高め、無駄なエネルギーを使わない暮らしへの一歩を踏み出していきます。

（二）平和への取り組み

原子力技術は、軍事技術として原発の開発から生まれました。政府は「原子力の平和利用」であり、核と原発は無関係と言っています。しかし、1994年6月、日本政府は、非核三原

則を堅持すると言いつつ一方で「核の所有は憲法に違反しない」「核の使用は国際法に違反しない」という見解を表明しました。

しかも、「産業炉で作ったプルトニウムで核兵器を作ることは困難である」という主張も、米国が1962年に商業用の原子炉の使用済み核燃料を再処理して作ったプルトニウムで核弾頭を作り、核爆発実験を成功させていることが新聞でも報道され、核と原発は紙一重の関係であることは一層明白となりました。

1995年は被爆50周年。今年、ヒロシマ・ナガサキでは、原爆投下で亡くなった被爆者への最後の法要（50回忌）が営まれました。ヒロシマの平和公園にある原爆慰霊碑には「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」という言葉が刻まれています。にもかかわらず世界から軍事の核も商業利用の核もなくなっていない現在、改めて平和を誓い、ノーモア・ヒロシマ・ノーモア・ナガサキの決意を新たに脱原発の取り組みをすすめます。

（三）原発の計画・運転中止・廃棄・廃棄物処理・管理のために

日本で最も古い敦賀原発1号機（1970年運転開始）が、21世紀初めに廃炉にされる方針となりました（2011年5月現在廃炉になっていません）、1970年代に運転をはじめた原発は深刻な老朽化がすすんでいます。1975年運転を開始した玄海原発1号炉は、現在、蒸気発生器内の細管の35%が損傷し、その修理代に年間50億円も

1995年からずっとグリーンコープは

東京電力の原子力発電所の事故を受けて、残留放射能検査を行いました 4月23日～5月13日に検査した29品目について残留放射能は検出されませんでした

No	商 品 名	検 査 出 荷 日	放射能検査結果	
			セシウム-134	セシウム-137
1	韓国味付のり胡麻風味	2011年4月23日	検出せず	検出せず
2	うの花クッキー	2011年4月23日	検出せず	検出せず
3	コールスロードレッシング	2011年4月25日	検出せず	検出せず
4	紅鮭(米国産)のハラミ	2011年4月26日	検出せず	検出せず
5	ヤリイカ(ベトナム産)煮付・バター焼き用	2011年4月26日	検出せず	検出せず
6	干し帆立貝柱ブロックン	2011年4月26日	検出せず	検出せず
7	草加せんべい(しょうゆ味)	2011年4月26日	検出せず	検出せず
8	コーンスナックキャラメル	2011年4月26日	検出せず	検出せず
9	チョコレートクリーム	2011年4月28日	検出せず	検出せず
10	韓国味付のり唐辛子風味	2011年4月28日	検出せず	検出せず
11	能登天然岩もすく(味付)	2011年4月29日	検出せず	検出せず
12	骨ごと食べられる さんまみそ煮	2011年5月 2日	検出せず	検出せず
13	骨ごと食べられる サバの味噌煮	2011年5月 2日	検出せず	検出せず
14	和光堂レーベンスミルクはいはい	2011年5月 6日	検出せず	検出せず
15	産地指定米こしひかり5kg	2011年5月 9日	検出せず	検出せず
16	コールスロードレッシング	2011年5月 9日	検出せず	検出せず
17	紅鮭スモークサーモン切り落とし	2011年5月 9日	検出せず	検出せず
18	ひじきがんもの野菜あんかけ	2011年5月 9日	検出せず	検出せず
19	国産果汁グミ ぶどうとりんご	2011年5月 9日	検出せず	検出せず
20	三色だんご	2011年5月 9日	検出せず	検出せず
21	果実酒用リカー35%	2011年5月10日	検出せず	検出せず
22	骨ごと食べられる カタクチイワシみそ煮	2011年5月10日	検出せず	検出せず
23	いかねぎバーグ	2011年5月10日	検出せず	検出せず
24	山芋と蓮根の肉だんご(黒酢あん)	2011年5月10日	検出せず	検出せず
25	えびといかの彩り焼き	2011年5月10日	検出せず	検出せず
26	海老と三つ葉の彩り寄せ	2011年5月10日	検出せず	検出せず
27	ビーマーみどうぶ 夕れ付	2011年5月11日	検出せず	検出せず
28	産直赤とんぼ米の鶏ごぼうピラフ	2011年5月11日	検出せず	検出せず
29	冷凍クラムチャウダー	2011年5月11日	検出せず	検出せず

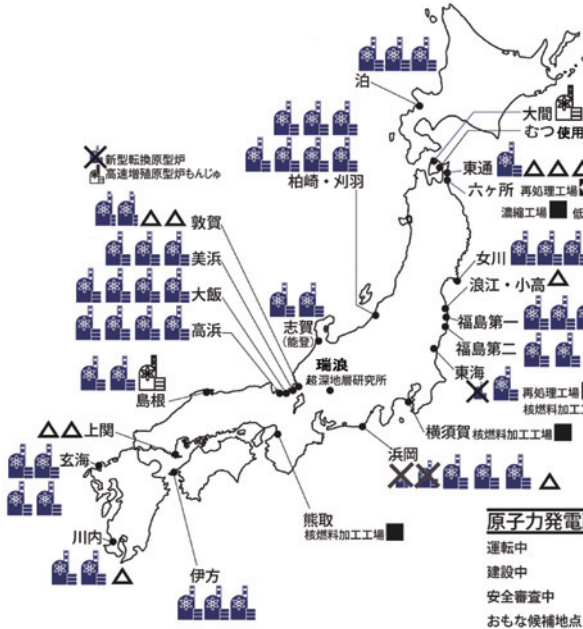
〈検査対象エリア〉グリーンコープは商品や原料について放射能汚染が心配される地域を関東から南東北地方と考えています。文部科学省から出されている(新聞で報道されている)大気中の「環境放射能水準調査結果」を基礎に、通常レベルより高いエリアについて念のため検査対象としています。
※水産物については、近隣海域の放射能汚染状況が調査・公表されますので、その情報などをもとに漁獲海域によって、残留放射能検査をする対象を判断していきます。

〈検査対象〉3月11日以降に、対象エリアで生産・製造・保管されていた商品及び原料を順次検査しています。

〈検査機関・検査日〉「放射能汚染食品測定室」で行いました。表中の「検査出荷日」は検査のためにグリーンコープから、測定室に検体が発送された日です。到着後、2日以内に検査を行っています。

〈今後の報告について〉・毎月、共生の時代で報告します。(ホームページには、週単位で掲載します)
・グリーンコープの基準値(放射性セシウム10ベクレル/kg)を超える残留放射能が検出された場合は直ちに報告します。
※表中の「検出せず」は、検出限界値(1ベクレル/kg)以下です。

原子力発電所および核燃料施設



【2011年3月末現在 JAIF 社団法人日本原子力産業協会

かかることから、蒸気発生器を丸ごと交換する工事が6月から行われました。1994年6月末に福島第1原発2号炉で炉心の核燃料を覆う筒状隔壁(シユラウド)にひび割れが発見されました。このことはこれまで炉心周辺機器に事故や故障が起きてきたが、いよいよ炉心に故障が及んできた、つまり老朽化の進行が深刻なまでにすすんできたという警告です。

現在(1995年)、国

内の原発から発生した使用済み核燃料は、原発敷地内で冷却保管(約3500t・1992年現在)の後、英・仏へ再処理委託(6700t・同)、東海村の動燃再処理工場へ(約610tを再処理済み・同)の2つのルートで再処理されています。しかし、余分のプルトニウムを持つことが許されていないため、使用済み核燃料のすべてが再処理されているわけではなく、そのまま冷却プールで保管され

ています。48基の原発(1994年8月現在。ふげんを含む)が、このまま運転を続けられ、使用済み核燃料だけでなく、原発敷地内に保管されている52万本のドラム缶詰めの低レベル放射性廃棄物(注3)が増え続けることとなります。こういう状況の中で、現地で反対運動や市民運動とともに、原発の計画、運転の中止・廃棄を求めていく取り組みが求められています。

具体的な取り組みの すめ方

(一)組合員活動として、
次の項目を推進していきます

- ・事実を知る。知らせる活動を行う。(学習会と学習会用資料の作成、講演会、写真展、映画会、情宣活動など)。
- ・生活を見直す。
- ・家庭でのエネルギー消費の点検(例えば、1個作るためにその250倍の電力を必要とする乾電池の使用を減らす、などの誰にでもできるエネルギー点検と実践)。
- ・年間のエネルギー消費を削減する取り組み(例えば、過剰な冷暖房や車やエレベーターの安易な使用などの点検と実践など)。
- ・個人住宅での自然エネルギー利用をすすめる(省エネ型住宅や太陽光発電(注4)などの利用)。
- ・年に2回のノーマイカイデー(例えば4・26チェルノブイリ事故、10・26反原子力の日)を設定し、車に頼る生活を見直すきっかけにする。
- ・8・6、8・9原発記念

日の黙祷を地域や家庭で行う。
・市民グループとの連帯(チェルノブイリ支援の継続など)。

(二)グリーンコープの事業体として、次の項目を推進していきます

- ・生協施設内のエネルギー消費を点検し、年間消費の削減計画を立てる。
- ・配送・配達のエネルギー消費を点検し、年間消費の削減計画を立てる。
- ・事務所・デポ・店舗でのコージェネレーション・自家発電の研究をすすめる。新店舗や新デポでの実験展開を準備する。
- ・グリーンコープの取り扱い商品を点検し、石油製品をできるだけ排除する。
- ・自然エネルギーを利用して商品の開発・取り扱いを行う。
- ・連合での情報媒介機能の充実を図り、連合・単協・地方に脱原発担当事務局を設置する。
- ・役職員・職員・組合員対象の脱原発の学習会・情宣を行う。

(三)政府・電力会社に働きかけていきます

- ・原発に偏っている電力政策を、自然エネルギー利用の方向に変更させることを政府・電力会社に求める。
- ・政府・メーカーへ、より一層の節電型の電気器具や電気機器の研究開発を呼びかける。
- ・政府へ自然エネルギー推進(補助金の充実など)政策を求める。
- ・九州、山口の運転中の原発の運転中止ならびに原発建設計画の撤廃を求め

る現地の反対運動や市民運動に連帯する。
・一日と老朽化の進む原発の廃棄と廃棄物の管理を設置者および国の責任で行うことを求める。
・九州電力・中国電力の消費者株主運動に連帯する。

おわりに

グリーンコープの脱原発の取り組みがグリーンコープ組合員一人ひとりの意識を揺さぶり、グリーンコープ全体から、更に地域へと広がっていく中で、徐々に原発を越える社会(真の意味で豊かな生活と地域の創造)に近づくよう努力していきます。

(注1)死の灰

原子炉内でウランを燃やした後の燃えカスを放射性廃棄物Ⅱ「死の灰」と呼ぶ。100万kwの原発を運転するには、1000tもの濃縮ウラン燃料が必要で、その内30tが毎年取り換えられる。これは使用済み燃料といつて大部分が「死の灰」である

(注2)コージェネレーション

小型の自家発電装置。燃料はガスでも石油でも可。投入エネルギーの3分の2は廃熱となるが、この廃熱を利用して冷暖房や給湯に利用するのがコージェネレーションシステム。廃熱を利用するので、熱効率は70～80%に達するとされている

(注3)低レベル放射性廃棄物

取り替えた配管、使用済みの制御棒、作業員が着用した作業着や工具、機械類などの固体廃棄物と、原子炉周辺機器からの漏れ水、作業着などの洗濯排水などの液体廃棄物がある

(注4)設備補助金制度

太陽光発電設備補助金制度 通産省・資源エネルギー庁は、1994年9月12日から、太陽光発電の設置費用の補助を開始。現在は経済産業省の所管で、自治体ごとに申請方法などが異なるが、助成金の制度は継続している

お米と野菜を食べよう!

-3-

各単協の取り組みが目白押しです

「お米と野菜を食べよう!」をすすめていくために、カタログGREEN1号より、リニューアルに着手。野菜の由来や栄養価などの情報を集めた「野菜生活」コーナー、産直青果・米の生産者情報と産地からのコメントなどの「元気な産地紹介」、生産者おすすめレシピなどを紹介する「野菜を食べよう!」のコーナーを充実させています。また、毎週グリーンコープ連合より、「おやさい通信」を発行して、カタログと一緒に届け、生産者の農業に懸ける思いや、日々の農作業のエピソードなどを紹介しています。

一方、生産者も青果の刷新に取り組んでいます。近年、利用が伸びない中で、どのようにしたら利用が広がるのかを検討。無農薬・減農薬の栽培基準をより高め、より安全でおいしい野菜を追求しながらも、できるだけ価格を下げることも挑戦しています。グリーンコープと生産者の間で相談しながら、できることから価格や規格の改定がすすんでいます。

2011年度のグリーンコープの重点方針の一つ「お米と野菜を食べて、安心・安全な食べもの」と日本の農業を守り、健康に生活していきたいという取り組みがすすんでいます。

今号では全体の概況、各単協での余剰野菜の活用や活発に行われている職員の産地体験などの進捗について報告します。

また、赤とんぼ米の包材デザイン募集、5月9日からスタートしたG C mailによる、青果連絡メールお届けの新たな仕組みについて案内します。



赤とんぼ米の包材デザイン募集

(6月6日～7月9日)

秋の新米登場に合わせて、赤とんぼ米の包材デザインを一新します。安心・安全なお米を食べたいという組合員の思いに応えて、生産者はできるだけ農薬や化学肥料を使わない栽培に励んでいます。赤とんぼの飛び交う自然環境を残したい…そういった思いが伝わるような、デザインを募集します。詳細は5月30日週配布のチラシで案内します。



産地体験研修交流

エリア内に産地のない、関西・中国地方の単協職員の産地研修は、予定通り多くの産地において実施されました。参加者は産直の素晴らしさを実感し、組合員に利用をおすすめる言葉を獲得しています。

また、身近に産地がある単協でも交流が行われています。みやざきでは、3月に3回にわたって綾菜会との交流研修を行っています(詳細は下欄参照)。

余剰野菜の活用

とっとり、おかやま、ひろしま、ふくおかの福岡地域・南地域、くまもと、かごしまで余剰野菜を活用する取り組みが行われました。配達時にトラックに積み込み、配達で出会った組合員に直接販売する取り組みです。それぞれ工夫を凝らしたチラシなどを作成して、直接おすすめの言葉を添えるなどコミュニケーションを図りました。野菜の利用が少ない組合員や、まだ利用したことがない組合員に、グリーンコープの野菜の美味しさを知ってもらい、少しでも多く利用してもらえるような取り組みにしました。

G C mailによる青果連絡メール配信スタート

(5月9日～)

2010年3月からはじまったG C mail (メール送信サービス) に組合員から要望の多かった、注文した青果物の欠品情報などが届くようになりました。このリニューアルを機にメール会員登録も簡単になりました。

携帯で



パソコンで



グリーンコープ生協
みやざき

職員が生産者と組合員の架け橋に

みやざきでは「お米と野菜を食べよう!」の取り組みをすすめていくために、職員が綾菜会との交流研修に取り組んでいます。3月は人参の収穫、白ねぎの収穫、ごぼう畑の除草を体験しました。

人参の収穫の手伝いをした職員は、「土の中から出てくる人参の大きさにばらつきがある現実と、組合員からの不揃いだという意見を思い出しとまどいました。しかし、この体験を組合員に伝えて、グリーンコープの産直の素晴らしさを届けたい」との感想を持ちました。

白ねぎの収穫は草取りされた、フカフカの土から根元をつかんで抜く中腰の作業。その後は、一本一本丁寧に皮を剥いての出荷準備でした。職員からは「ねぎが嫌いでしたが、昼食にねぎの天ぷらをいただいて、すごく甘みがあってとろみがある上に歯ごたえがあって美味しかったです。この美味しさを是非ねぎが苦手な組合員に伝えたいです」との感想もありました。

ごぼう畑の除草作業は、ごぼうの芽を抜かずに雑草だけを抜き取ります。軍手を外して素手で作業をしました。「爪の中で真っ黒になって、生産者の黒い手は作業の積み重ねが作った誇り高い手であることを改めて認識しました」と感想が出されています。最初は元気がだった職員も徐々に腰が痛くなり、生産者のご苦労の一端を体感。生産者から「除草は農作業の肝」と言われたことを実感しました。

3回の交流研修で、「このような場を通して生産者と私たち職員が近くなり、組合員さんに伝えていくことで組合員さんと生産者の距離も近づいていきます。精一杯アピールしていきたい」との決意を生産者に伝えました。



講師:宮崎利明さん
グリーンコープ連合
BM事務局

山に降った雨が落ち葉の積もった地表から地中の岩石を通りやがて地表に湧き出す、自然の循環システム。近代農業はその循環システムを破壊し、畜産農業では規模の拡大による臭い、ハエ、糞尿の処理の問題、耕種農業では化学肥料や農薬により疲弊した土地の問題などを抱えてきた。BMW技術は岩石などを使い、人の手によって自然と同じ循環システムを作るもの。

BMW技術で家畜の尿を分解し作った生物活性水を畜舎に噴霧したり家畜に飲ませることにより臭いは劇的に改善され、ハエがいなくなる。また、耕種農業では、BMW技術で作った堆肥で土の状態が良くなり、生物活性水を噴霧することで野菜の生育が良くなる。

グリーンコープでは畜産の生産者に生物活性水のプラントの設置を呼びかけ、青果生産者のところでは畜産生産者の生物活性水や堆肥が活用されている。1993年にグリーンコープのエリア内を対象に、グリーンコープの生産者とグリーンコープが会員となって「西日本BMW技術協会」が発足した。しかしグリーンコープとしての学習会は2006年を最後に開催できていない。2011年11月、福岡市でBMW技術全国交流会が開催されるのを機に、BMW技術のいっそうの普及を図りたい。

自然の循環システムを

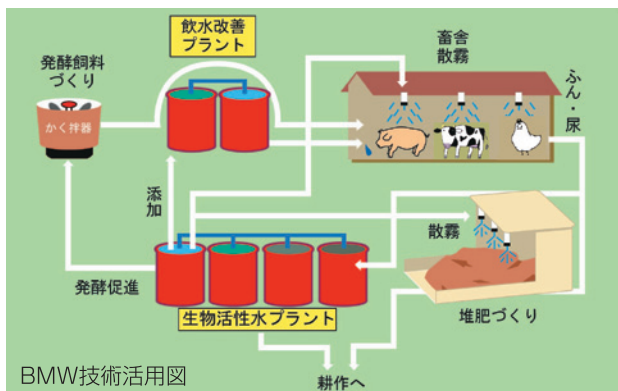
農畜産に生かすBMW技術

Bはバクテリア、Mはミネラル、Wは水（ウォーター）を意味します。BMW技術とは、自然の循環を現在の社会や農畜産の現場に取り戻す技術です。グリーンコープは20年近くにわたり、畜産や青果の生産者と連携してBMW技術に取り組んできました。

1月31日、グリーンコープ共同体主催でBMW学習会が開催され組合員127人と生産者7人が集い、改めてBMW技術に対する認識を深めました。

2011年度は各単協で学習会が予定されています。また秋には、1991年から毎年開催されてきた「BMW技術全国交流会」が、福岡市で開催されます。

学習会の内容について報告します。



BMW技術活用図



福岡県で40年以上採卵養鶏業を営んでいる。グリーンコープとは前身生協時代を含めると30年以上の付き合いになる。現在は糸島市で3万3千羽の親鶏と1万2千羽の雛を飼育している。飼育している鶏は生後1日ほどの雛から育てており、成長に合わせて鶏舎を替え

BMW技術の飲水で鶏が元気に育つ

産直たまご生産者 (有)ヨコテ 横手俊郎さん

福岡県で40年以上採卵養鶏業を営んでいる。グリーンコープとは前身生協時代を含めると30年以上の付き合いになる。現在は糸島市で3万3千羽の親鶏と1万2千羽の雛を飼育している。飼育している鶏は生後1日ほどの雛から育てており、成長に合わせて鶏舎を替え

BMW技術で野菜が元気にいしく

産直青果生産者

糸島BM農法研究会

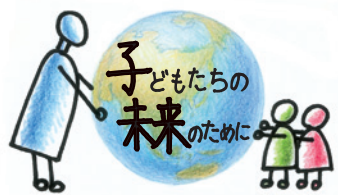


生物活性水を活用した畑では、カラーピーマンがいきいきと育っている

糸島BM農法研究会は、福岡県糸島市で6人のメンバーが小ネギ、ニラ、白ネギ、サニーレタス、スイートコーン、七草、ミニトマト、ほうれん草、ブロッコリーを栽培している。同じ糸島地区にある産直たまご生産者のヨコテさんや産直豚肉生産者「紅会」のBM堆肥や生物活性水を使い、それぞれに工夫して野菜作りに生かしている。

生物活性水は生物が本来持っている能力を引き出し、作物の発芽・発根、生長を促進、堆肥や有機肥料の発酵を促進する。病害虫にも強く、甘みも増しておいしい野菜ができる。

カラーピーマンは生物活性水に種子を浸し、苗に散布、定植穴にかん水する。その他の野菜もBM堆肥で土作りをし、生物活性水を定期的に散布するなどしている。BMW技術は、作物が元気にいしく育つために欠かせないものになっている。



No.34

放射能定期検査をなぜ

グリーンコープは、原発は「いのち・自然・くらし」を脅かすものとして脱原発に取り組んでいます。みどりの地球をみどりのままに、いのちを育む環境を子どもたちにつなぎ、安心して暮らせる社会をつくりたいと考えています。1986年に起きたチェルノブイリの原発事故をきっかけに、放射能汚染の問題は大きく取り上げられました。しかし、放射能の測定数値は公開されませんでした。そこでグリーンコープでは、食べものの安全性という観点から市民の立場で食品中の放射能汚染状況を把握するため、グリーンコープ商品の自主検査を開始しました。そしてこの間、安心・安全な商品責任を持って組合員に届けるために、継続して放射能定期検査を実施し、その結果をこの「共生の時代」で公開してきました。しかし、チェルノブイリ事故25年目にあたる本年3月11日発生した東日本大震災と東京電力の原子力発電所の事故は、放射能汚染が身近な問題であり、改めて定期検査をしてきたことの意味を実感することになりました。

今後は、東京電力の原子力発電所の事故に対応した放射能検査をすすめていきます。

グリーンコープ共同体組織委員会

投稿募集中

- わが家のエコ
- 私の好きなグリーンコープ商品

- 400字程度
- A4 毎月末
- 住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX、Eメールで送りください。掲載分には図書カード(500円分)進呈。
- 住所・氏名などの組合員の個人情報、本紙に掲載の場合のみ使用します。

〒812-8561
福岡市博多区博多駅前1丁目5-1
カーニブレイス博多3F
グリーンコープコミュニケーションワークス連(RN)「共生の時代」編集部 宛
FAX 092-481-7876
Eメールアドレス rikoho@greencoop.or.jp

投稿欄

言・い・た・い

私の好きなグリーンコープ商品

お肉の鮮度がいいですねー

わが家は育ち盛りの男の子が3人います。学校から帰ってきて、真先に聞くのが「晩飯、何？肉？」です。スポーツをやっているからでしょうか。「毎日、肉でもいいよ」と言います。グリーンコープのお肉は鮮度が良いので美味しいです。産直豚・鶏・牛肉の徳用をよく利用します。

これからも食べ盛りの子どもたちに安全で安心して食べられるお肉を提供してください。生産者の皆さんいつもありがとうございます。

グリーンコープ生協くまもと

村木ひとみ



左から松口慎也さん、森田敦子さん、吉村舞さん



ハーブを使った虫除けスプレー作りのようす

長崎県佐世保市、傾斜地に田や畑、青々とした木々が広がる緑豊かなこの地で、自然に寄り添い人間らしく生きることをテーマに活動をするグループ「アヒンサー地球に人にやさしい社会をつくる会」(以下、アヒンサー)があります。

会の発起人の一人である吉村舞さん、立ち上げ当初から関わっている森田敦子さん(ともにグリーンコープ生協(長崎)組合員)、メンバーの松口慎也さんに話を聞きました。



2006年、森田さんが営むフェアトレードカフェパオで、音楽を通して平和や環境のことを伝えるピアノのライブイベントが行われた。常連の吉村さんと気の合う仲間、このライブに強く感銘を受けた。「生きていく上で大切なことを皆で語りあえる会をしよう」と、このことが会を作るきっかけになった。

翌年、佐世保市内で上映された映画「六ヶ所村ラブソデイ」をきっかけに「原発やエネルギーのことを考えたら、自分たちの暮らしを見つめ直す必要がある。まずは知ることからはじめよう」と勉強会を開いた。当時のメンバーは吉村さんと森田さんを含めた4人。原発のことを調べていく中

で「アヒンサー」という言葉に出会う。「アヒンサーはサンスクリット語で非暴力、非殺生という意味。生命あるものを殺さない、傷つけない。世の中を幸福にするために、心と身体と言葉で一生懸命に生きる」。この言葉が吉村さんたちの思いとぴたり当てはまった。「社会全体から暴力をなくし、環境や暮らしにつながるいろんな情報をメンバーや周りの人たちと共有できる場を作っていきたい」という思いでアヒンサーを立ち上げ、定期的に勉強会を開いていった。

仲間との出会いから活動が広がる

アヒンサーの活動は、代表を置かず、やりたいことを提案したメンバーがリーダーになり、主催する。その催しに興味と時間がある他のメンバーがバックアップするというスタイルだ。「オランダの花屋さん」を営む吉村さんは、暦と自然界の花の開花時期がずれていることに疑問を抱き、それが「旧暦」を知るきっかけになった。農業、漁業など自然に関わりの深い仕事には旧暦が必要不可欠



手作りワークショップで廃材を使って楽器を作っている親子



アースデイさせぼ2009の会場のようす。色鮮やかな飾りつけで来場者の目を惹いた

だ。自然と調和のとれる暮らしは、人間の身体や環境に無駄なものを減らすことにつながる。吉村さんは暦から暮らしを見直す「旧暦について」の勉強会やワークショップを開いている。18年以上もフェアトレードの店を営んでいる森田さん。当初「海外協力になれば」と思っはじめたが、次第に「自分たちの使い捨て社会が自然を破壊し、知らないうちに『南の国』を踏みつけている。まず自分たちの生活を見直すべきだ」と考えはじめた。「フェアトレード」の勉強会、また「食について」のワークショップ、音楽イベントなどを自身の店で開催している。

2年前、松口さんは「小さな農産加工所を開き、食を通じて教育活動を行いたい」と吉村さんのすぐ隣に越してきた。アヒンサーの活動を知り、何の迷いもなくメンバーになった。現在、食を通して生命や言葉をつむぎ、食と向きあう機会を持つ「たべつむぎ」や、森田さんと共に、普段自分たちが口に入っている食べものについて改めて考える「いのちと食をめぐる会」を開いている。

小さな活動が大きな力に

2009年4月、アヒンサーと地域で作りあげた大きなイベント「アースデイさせぼ」が開催された。その年の秋には、佐賀の玄海原発でプルサーマル計画が実施されようとしていた。この問題も含め、参加した人に地球や自然のを感じてもらい、その尊厳や大切さを共に意識してもらいたいと企画した。アヒンサーは会としてプルサーマルを知ってもらうためのパンフレットを作成。イラスト

2011年4月の組合員数 395185人 (4/20現在)

リユースリサイクルデータ 2011年3月分 回収本数 180,208本 回収率 71.0%	牛乳びん 回収本数 729,270本 回収率 99.9% (2月13日～3月12日回収分)	フードマイレージ 2011年4月までに組合員の利用によってたまったのは 99,794,697.4 poco CO ₂ に換算して9,979トン削減したことになります
リユースびん 回収本数 180,208本 回収率 71.0%	トレー 回収重量 9,867kg 回収率 53.5%	アジア民衆基金 2011年4月までに組合員の利用によってたまったのは 15,710,677円
モールドパック 回収重量 32,890kg 回収率 87.8%	仕分け袋 回収重量 1,369.0kg 回収率 9.1%	

放射能汚染測定結果報告(210)

放射能汚染食品測定室検査。NDは、検出限界値(1ベクレル/kg)以下です。※は、グリーンコープ連合取り扱い商品

	検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計ベクレル/kg
※	生しいたけ	宮崎県	ND	ND	ND
※	生しいたけ	福岡県	ND	ND	ND
	ホダ木	福岡県産生しいたけ分	ND	ND	ND

や文章をメンバー皆で考え子どもから大人まで分りやすい内容にした。当日は、当初の予想を超え2000人以上の参加があった。環境や体に優しい自然食、フェアトレード商品、無農薬の野菜や米、手作りワークショップなどのテントが立ち並び、会場の中央は環境活動やトーク、音楽ライブなどで盛り上がった。「あんなに人が集まると思わなくて、プルサーマル反対の署名用紙のコピーに近くのコンビニへ走りました」と吉村さん。

また、今年4月には2回目となる「アースデイさせぼ2011」が開催された。「今回は出店数も倍に増え、佐世保で活動している人たちがこんなにいたことに驚きました。少しずつでも、何か行動を起こすことでだんだん形ができ、力になっ

ていくことを感じました」と森田さん。「これまでアヒンサーが行ってきた活動を、アースデイでより多くの人に還元しているんです」と松口さんはにこやかに話す。「アヒンサーはメンバーそれぞれが自立しているとい何もできません。自分がやりたいことを実現するための一つを、アヒンサーがサポートをしてくれる。これからも欲張りに、色々なことにつながりあって会をやっていきたいですね」と吉村さんは語った。

※1 1970年、アメリカのG・ネルソン上議員が、4月22日を「地球の日」と宣言したのがはじまり。地球環境への関心を表現するユニークなイベントが行われる。日本では1990年から各地で開催され、その活動は現在も広がっている。

※2 プルトニウムとウランを混合したMOX燃料を原子力発電で使うこと。玄海原発3号機で使用された